

花園をめざして

第28期 水谷禎憲

28期は6名である。人数が少ないため、必ず上級学年、下級学年と一緒にチームを形成してきた。そのため、チームカラーといっても28期だけではできない部分もあるが、水谷・滝沢の素早い動きでラックをめくり、そのサイドを伸・大久保の素早いパス&リターンで抜き去り、あとは秋本・花沢の俊足の両ウイングに託すといった速攻パターンがあった。

チームの形成は、3年生が全国大会の予選で引退してからはじまる。新人戦で当時全盛期の目黒と当たった。ジャパンのキャプテンとなった松尾が同学年で在学していた。練習試合では大敗したが、こちらが積極的に出たときは必ずトライに結ぶつき2トライをあげたので新人戦では勝利を期して臨んだ。前半3-0でリードしたが、後半3-14で計6-14と負けた。秋本と長井がトライをした。特に、二つ目のトライはX攻撃と名付けたもので、PKからFWがチップキックで前に出た瞬間に3人でモールを組み、後方よりそのサイドをつく。はじめの一人はおどりで、二人目がボールを保持して突進する。このサインプレーは、まったく独自に開発したもので、目黒戦では絵に描いたように決まった。それまで、FWでこういうサインプレーを仕掛けるチームはなかった。その後、あちらこちらで大学も含めて真似をするチームが増えた。

しかし、このメンバーの29期の多くが戦列を離れたため、同様のメンバーでこのあとを戦うことが出来なかった。

29期は部員も多く、小野君をはじめとして素質的にも優れていた。花園への夢をかけてハードな練習をすることもできた。やめていったメンバーも含めこの目黒戦のメンバーを紹介して思い出したい。

1副田 2岡田 3池亀 4水谷 5羽田野
6内藤 7長井 8滝沢 9伸 10大久保
11秋本 12林 13桐ヶ谷 14横山 15小野

関東大会予選は、新一年生を5人も入れながらも勝ち進み、関東大会出場をかけた試合ではあと1トライというところで都立三鷹に破れ、インターハイ予選も1トライ差で都立青山に破れた。相手が3年生中心にチームを組んでいるのに随分と無理をしたものだと思う。

幸い30期は人数が多く、やんちゃな連中が多かったが、この期を育てることで、我々の期が果たせなかった夢に近づくかもしれないと希望を感じた。キャプテンとしても未熟ながら自分の期よりも下の期をどう育てるかという所に練習の中心を置いた。練習計画もチーム戦術よりも個々のプレーヤーの素質を磨き体力を付けるように組んだ。何とかやめないで育てて欲しいというのが願いであった。

夏合宿は東大検見川総合グランドで行った。徹底的にスクラムを組み下級生に教えたといったような感じである。やたらと暑かったことだけを憶えている。

28期の全国大会予選の最後は、29期が修学旅行で欠場し、28期も4名のみ出場した。滝沢、水谷がバックス

に回り30期11名で臨んだ。結果は、開成高校と引き分け抽選負けであった。

この頃は23期の先輩がよく顔を出してくれてお世話になった。しかし、日常的にはキャプテンが指導者の形でチームを組んでいた。今から思えば、日本のラグビー界全体がそうだったのかもしれないが、スクラム中心でとにかく前に出て当たるもんだというので、ディフェンス網の作り方も単純で薄く、オフェンスの意図的な継続性もセンター勝負であとはフォワード次第であった。モールを意図的に組むという作戦が導入されたのも我々の時代からであった。それまではラックしかなかった。立って組むラックは当時ではできていなかった。今で言えばパイルアップになっている団子状態めがけて低く突っ込んで、寝ている選手を敵味方含めてめくりあげるといのがラックであった。でも、これをやると確かにボールは出てきた。

個々のプレーヤーの力量は大切な要素であるが、チームとしての力を育てるのはなかなか現役の学生だけでは難しいことがあった。自分たちで考えるということを否定するものではないし、それなりの発想もあり、創造的な部分もあった。また、技術面での練習は見習うべき先輩も多く、コンビネーションもそれなりの練習があったと確信していた。しかし、トレーニング方法や継続性、フィットネスや走り込みなどラグビー以前の部分で発想自体が未熟であったし、そんな時代であったと感じている。

（ キャプテンより 同期生の紹介 ）

- 滝沢伸はフランカー、小柄で地味なプレーだが、忠実なタックルとサポートプレーをこなしてくれた。
- 仲育男はスクラムハーフ。ブラインドサイドの展開は鋭い。当時スピンパスを投げていたのは珍しい。現在行方不明。
- 大久保正剛はスタンドオフ。合宿ではよく倒れたが、それでも走った根性の人。卓球は当時東京のトップクラスだった。
- 花沢周二はセンター・ウイング。一年生から俊足バック스로注目を浴びる。繊細で怪我が多くガラスの周二と呼ばれた。
- 秋本裕蔵はウイング。ロングトライをよくきめた。オール東京に選ばれ晴れの秋父宮で走った。しかし、ボールを持って走ったのは一回だけ？
- 水谷禎憲は第一列を中心にFWはどこでもやった。キャプテン。スタミナだけは自信があった。